

「森林の多面的機能」  
解説シリーズ

## 第3回 固有昆虫保全の場としての里山二次林

多摩森林科学園 松本 和馬

## 意外に固有種が多い里山二次林

「固有種」という言葉には、生息地が限られ個体数が少ないといったイメージが伴うが、固有種は必ずしも希少種というわけではない。大都市近郊の里山二次林（雑木林）にもかなりの日本固有種が生息している。東京近郊に例をとると、オニヤンマ、ハヤシノウマオイ、モリオカメコオロギ、ナナフシモドキ、マイマイカブリ、アオオサムシ、コチャバネセセリ、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲなど普通に見かける昆虫が日本あるいは日本列島の固有種である。

もう少し広い目で見ると、雑木林の昆虫には東アジアに固有の種が非常に多い。東アジアは氷河期に温帯性落葉広葉樹の避難場所であり、今日まで落葉広葉樹林が存続してきたためである。日本では最後の氷河期が終わるとまもなく縄文時代が始まるが、照葉樹林の北上が遅かったため縄文中期頃まではコナラやクリの暖帯落葉広葉樹林がかなり広範囲に存在し、一方ではこのころから徐々に人手の入った二次林ができ始め、照葉樹が北上してきてからも温暖地に落葉樹の二次林が存続して里山昆虫の住処となってきたらしい。

## 里山昆虫の衰退と保全

里山二次林の昆虫で日本から姿を消した絶滅種は今のところないが、地域的な絶滅はかなりあり、衰退傾向の認められるものも多い。

ギフチョウは東京都の里山から絶滅した固有種の一つである。ギフチョウの絶滅の原因には上述の里山二次林の環境変化に加えてスギ植林や宅地開発などで生息場所が悪化、消失したこともある。多摩森林科学園は1970年代には都内唯一のギフチョウの生息地と記録されていたが、この個体群は必ずしも環境が悪化していないにもかかわらず絶滅してしまった。この地での絶滅の主因は個体群の孤立化であろう。本種の成虫は散在するパッチ状個体群間で数百m～1kmの移動を盛んに行う。多摩森林科学園の孤立した個体群から飛び出した個体は好適な生息場所を見つけることができず、外からこの個体群に飛来加入する個体もなく、最終的に絶滅したのではないだろうか。

暖温帯の里山二次林は放置すれば照葉樹林に移行すると考えられ、落葉樹林を住処とする昆虫には住みにくくなる。また林が放置されてクヌギやコナラの大径木化が進み、下層植生が繁茂したため生息が困難になっている種もあるだろう。加えて面積が縮小したり消失したりして林が断片化することが多いので、そこに住む昆虫は同種他個体群と交流する機会を奪われている場合も少なくないだろう。今普通に見られる種も事態の進展によっては絶滅への道を歩むかも知れない。

環境省の指定する絶滅危惧種には島嶼や高山の希少種（この中には国外に広大な分布域を持っているものも含まれている）と並んで里山二次林の昆虫の中にもギフチョウのような衰退傾向にあたり採集圧を受けたりしている種も含まれている。しかし絶滅危惧種とはみなされていない里山二次林の「普通な」固有種も、日本のかけがえのない財産である。彼等が普通で身近であるだけに採集禁止や保護区の設定といった措置を取ることは奇妙であろう。それならば、例えばランドスケープマネジメントのような少し違った視点で彼等の保全を考えてみる必要があるように思われる。



写真 里山二次林に普通な日本固有種のヒカゲチョウ